

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第71回

小松清のヴェトナム

稲賀 繁美

(いながしげみ/国際日本文化研究センター、
総合研究大学院大学)

小松清(1900-1962)とって誰のことかピンとくるのは、かなり年配の、それもランス文学関係者に限られるだろう。同姓同名同世代のフランス派作曲家と混同する向きもあろうが、ここで取り上げるのは、人民戦線との絡みで、行動派文学の旗手として活躍した著者のこと。だが同時代体験として小松清の名を記憶する最後の世代も、団塊世代より10歳近く年配となりそうだ。

1921年にパリに渡った小松は、現地でヴェトナムの愛国者にして共産主義者、阮愛国 グエン・アイコクと交友を結んだ。小松が乗船したクライスト丸は、ドイツの第一次敗戦の代償船の一隻であり、そこで小松は、たまたま小出楯重はじめ、林俊衛、坂本繁二郎、正宗徳三郎らの画家たちと同船だった*1。かれらが居候したパリの宿舍は、ソムラール街。バンテオンのあるサント・ジュヌヴィエーヴの丘を北にむかって下ると、ノートルダム大聖堂のあるシテ島に至るが、ソムラール街は、その途中の坂道の中腹に位置する。小松の仏共産党絡みの行状ゆえに、ここにはフランス国家安全局の密偵が張り付き、日本人たちの動向を探っていた。秘密警察の報告書には、坂本繁二郎や、児島虎次郎、碓伊之助などの名前まで出現し、筆者はいささか驚いた経験がある。大杉栄が密かに日本を出国してマルセイユ経由でパリに潜入し、メーデーの日にリュクサンブール公園で演説して逮捕され、サンテ監獄に収監された未、強制

送還となるのも、この翌年から翌々年にかけてのこと。小松は、大杉の傍若無人なくせに憎めぬ人柄も、一幅の肖像に仕立てて未刊の草稿に書き残している。

小松清といえば、全盛期のアンドレ・ジッドや、駆け出しのアンドレ・マルローらと親交を結んだことで知られている。マルローの『人間の条件』は1927年の上海動乱を舞台に、蒋介石の弾圧に抵抗する革命家たちを描いた小説だが、主人公となる混血児、キヨ・ジゾールは小松清を下敷きにしている。カマ(蒲)画伯のモデルも京都の日本画家の近藤浩一路で、これも1931年に来日したマルローに小松が紹介したもの。マルローは近藤を軸にして、1932年パリで日本美術院の展覧を企画したものの、横山大観が難色を示し、計画は水泡に帰した、という一件が知られる*2。附言すれば、『人間の条件』は1937年以降の日本では、そのままで翻訳刊行はとも無理な代物だった。1938年に小松が新庄嘉章とともに、英訳の題名を参照して『上海の嵐』として共訳したが、削除は140箇所、四百字原稿にして4枚におよぶ伏せ字頁を含む姿で、1938年、「奇跡的」に刊行された。

小松は1937年8月19日、スペイン共和派義勇軍への参加を目して再度渡欧するが、日本国籍ゆえにスペイン入国を阻止され、1940年6月12日、陥落寸前のパリを脱出し、リスボン経由で帰国する。1941年には4月から7月まで、改造社特派員の資格で仏領

インドシナの西貢サイゴンに渡るが、その思想と行動ゆえか、1941年12月7日の日米開戦の翌日に逮捕され、4カ月ほど投獄される。保釈のすえ、43年4月、田代特命全権大使の随行という名目で仏領印度支那の河内ハノイへと渡航。裏には平沼騏一郎の斡旋があったという。越南からの帰国は日本敗戦翌年、1946年の5月となる。

この二度にわたるヴェトナム滞在中で、小松がとりわけ親交を深めたひとりに、劉文泰リュ・ヴァン・タイが知られる。劉と小松とはフランスですでに画家仲間として知りあっていた。いまでは忘れられているが、小松自身、1927年の第37回アンデバンダン展に出品しており、その後3年にわたってカオールの近郊、サン・シール・ラポピで絵画制作に打ち込んでいる。ここでの芸術家仲間のひとりがリュ・ヴァン・タイだった。ヴェトナムに到着した小松は、いまは父の事業を継いで、詩人・阮江ニュエン・ジャンを名乗っている旧友に再会した。劉の父は、高名な文人、阮文永ニュエン・ヴァン・ピンであった。その人の手になる仏語訳『金雲翹』Kim Vam Kicouを阮江から渡された小松は、これを日盛りの熱暑の時間にホテルの部屋で読み耽ったという。阮攸Nguen Du (1765-1821)の著したこの古典的長編抒情詩にヴェトナム国民文学を見定めた小松は、阮文永訳に加えてルネ・レイサクによる仏訳を助けに、これを日本語に翻訳し、収監から保釈後の1942年秋に出版している。

その経緯は、一度目の滞越南期の随想集『仏印への途』(1941年12月刊)に触れられている。同書に収められた「案南の女」では、劉文泰より郊外の別荘に招かれた経験に触れて、フランス滞在中の回想に及んでいる。小松と劉はともに、文筆の多忙ゆえに絵筆を折った経験を共有していた。こうした経歴もあったためだろうか、同書巻末の「仏印日記抄」には、現代安南美術の総合展で目にした阮文己の作品に「釘付け」となり、ジャーナリストのNに購入を勧めた逸話を披露している。Nは満鉄の東亜経済調査局から派遣された人物だったという。さらに

小川総領事の肝いりで、その阮文己の作品が日本でも展示されることになった経緯が、後日談として、後記に付け加えられている。

「仏印現代美術展」は日本橋三越で1943年6月2-6日と開催され、グエン・ヴァン・テイ、ルオン・スアン・ニー、グエン・ナム・ソンの3名の画家が日本に招聘され、日本滞在中に制作した作品も紹介された。

この日本における仏印現代美術展は、前年の1942年10月から実施された、「仏印巡回日本絵画展示会」と表裏をなす企画だった。仏印巡回展には、国際文化振興会からの委嘱により、講演その他説明役の名目で藤田嗣治が派遣されている。この時期、小松は息子の病死により急遽帰国していたので、現地で両者が出会うことはなかったはず。「仏印巡回日本絵画展示会」は河内ハノイ、西貢サイゴンと巡回したが、12月7日の「大東亜戦争勃発」のため、プノンペンでの展示は開催不能となり、そのまま終了している*3。「この文化使節の大任を日本画家の列に入らぬ油絵画家の私がお引き受けすることの如ちがい」には、藤田自身も「満々承知」だった*4。だが「日仏印文化親善交換」の文化工作には、フランス語に堪能な藤田は不可避の人選だった。

藤田が日本の公式代表の役目を几帳面かつ堂々とこなしたのに比べれば、小松清は、問題児として戦時下の日本を厄介払いされたに等しい存在だった。左翼といっても人民戦線の思想に共鳴していた小松だが、彼の側にしても、戦時下の内地では活動の余地もなく窒息状態だったに違いない。だがこの外れ者、一匹狼の小松は、日本敗戦直後、フランス代表部からの秘密の要請をうけ、特異な役回りを引き受けることになる。それは、ヴェトナム側との停戦協定締結のため、両者を橋渡りする水面下の裏工作にあたるという任務だった。小牧近江ほかも関わった1945年下半年から翌年3月に至るその活動ぶりは、『ヴェトナムの血』(1954)に詳しい。小説仕立てで、現在絶版だが、史料的价值も含めて、復刊に値する貴重な裏面史、と筆者は見ている*5。敢えて小

説という形式をとらざるを得なかった理由のひとつは、ヴェトナムから出国する時点で、資料や写真など、所持品一切の持ち出しを中国国民党官憲から禁じられたため、という。帰国までの激動の半年のあいだに、小松は、潘玉拓 ファン・ニョク・タックや階文教 チャン・ヴァン・ジャオら知人たちの要請と勧めによって、ハノイ臨時政府代表となる胡志明 ホー・チミンと、1945年11月に単独会見を果たす。その記録は、『朝日評論』（1950年3月号）掲載の「ホー・チミンに会うの記」を下敷きに、『ヴェトナムの血』にも詳細に述べられている。だがはたしてこのホー・チミン主席は、小松がバリで知っていた、かの阮愛国 ゲン・アイコク と同一人物なのか。たしかに人相は驚くほど似ているが、性格が異なり、体格のうえでも、ゲンが小松より背丈が高かったのに、ホー・チミンは小松より小さかった。そうした観察から、小松は両者別人説を唱える。公式見解とは相容れない異端の説だが、その真相は、現在なお謎に包まれている。詳細は、準備中の別の論文に譲りたい*6。

後年の小松清は、アンドレ・マルローの美術評論なども精力的に日本語に訳した。没する前年、1960年に、その小松は「若き日の肖像」という好エッセイの遺した*7。戦前のモンパルナスの蜂の巣のアトリエから、西にむかうヴォージュラールの屠殺場近

くのカフェなどが点描され、往事の芸術家溜まりの臨場感を誘う。小松の回顧するのは、バリで親交を結んだ画家、アダモフが、小松の肖像の制作に没頭する様である。モデルとなった小松は、ふと微睡むが、その夢のなかに12・3歳の少年時代の想い出が不意に蘇る。清少年はある日、凶工の教師から、突然級友たちの面前で罵倒された。おまえにこんなものが描けるはずはない。先生をごまかそうとしたって駄目だ。誰か大人に手伝ってもらったものを、よく凶々しくも、休暇中の宿題ですなどと、もってこれたものだ。凶工の教師はそう怒鳴るや、清少年が子どもなりに苦心して丹精込めて描いた梅の花の絵を、同級生たち看視のなかで、ずたずたに引き裂いてしまった。少年の抗弁は冷酷にも無視され、そればかりか、教室の隅からはクスクスと、忍び笑いが聞こえてきた。嘘つき呼ばわりされたことへの憤りと、級友からの嗤いが少年に与えた、いいようのない屈辱感と。この原体験が、小松清のヴェトナムへの止みがたい共感と、どこか心の深いところで通じているように思われてならない。他国の横暴と蹂躪のもとで、虐げられた者たちが培う文化的な矜持。それへの直情的な連帯意識が、小松清の行動主義を律する倫理的な、いや倫理以前の格率だったようだ*8。

【註】

*1 匠秀夫『小出橋重』日動出版部、1975、67-171頁。

*2 林俊・クロード・ピシヨワ『小松清 ヒューマニストの肖像』白亜書房、1999。このきわめて充実した評伝には、第3章に小松の未完の自伝草稿の抜粋があり、大杉栄とのやりとりも描かれている。マルローとの関係については同書123-135頁。なお小松清「近藤浩一路」『芸術新潮』1953年11月号207-214頁も参照。

*3 桑原規子「国際文化振興会主催「仏印巡回現代日本画展覧会」にみる戦時期文化工作」『聖徳大学言語文化研究所論叢』第15号、2008年、229-262頁、また『ベトナム近代絵画展』福岡アジア美術館他、2005-6 所収の後小路雅弘「ベトナム美術の「近代」」を参照。

*4 藤田嗣治「仏印と日本美術-仏印巡回展本会派遣使節報告」『国際文化』国際文化振興会、18号、

1942年、73-77頁。

*5 ベネディクト・アンダーソンの『ヤシガラ碗の外へ』加藤剛訳、NTT出版、2009年には、インドネシアの事例として、独立運動に関与した前田精元海軍少将との会見の逸話が見られる。日本敗戦直後に「南方」で現地の独立運動に関わった日本人の事績の比較検証が待たれる。

*6 本件も含めビン・シン「小松清 ベトナム独立への見果てぬ夢」『世界』2000年、4、5月号が、英語圏で出版された総合的な検討として、もっとも信頼性の高い論考である。

*7 小松清「若き日の肖像」『自由』、1961年10月号、134-139頁。

*8 本稿は、2009年11月21-23日にハノイのヴェトナム社会科学院で開催された、日本研究50周年記念「第2回東南アジア日本研究学会」での報告「小松清とヴェトナム」の余滴である。